

文藝

栖神居詠草

福島義孝

旅の歌

あかね雲うつろひゆけどほのぼのと印旛の沼は夕明りせり
秋の田のゆたかにそよぐ野を遠み雲のおりぬる筑波嶺は見ゆ
老い母をいたはる人の側にして舞臺を見つつ吾が樂しまず

秋日家居

うち續く日和に老いも幼きも田毎ゆきつつ落穂拾へる
てのひらにむしりて見れば糶粒の圓く堅きは乏しかりけり
稲架の間をかひくぐりつつ聲あげてたにしを採ると子らはきほふも
田に畑に葡萄のみ植ゑし村人のたつきはまさにきはまらむとす

歳暮吟

張りかへし障子明るき部屋ぬちに妻は南天を活け上げにけり
新刊の歌書は欲しけれおしせまる暮を思ひて書架にかへしぬ
子どもらにはせめてと妻のなげかふをうべなひつつも黙しぬにけり
食卓の狭きを妻のいふほどに四人の兒らは伸び育ちたり
なみよろふ一萬尺の高山のみ雪を染めて日は生れにけり
穂すすきのあら野の果に駒ヶ嶽のとがりつめたく夕かがやけり

古き遠保榮我記

山田友篤

吾人の魂は不滅であるとブリストは教へて呉れる。然し現象界に於ける吾人の生命は、決して時間を超えてはゐない。誰人であつたか

『人生はげに朝露の如く又流水の如きで百
花は散りて亦開き冬來ると雖も春の音信亦
蘇り來るを、運命の夜叉は導きて人は逝き
て其の跡香として空しく、今將た何れの國
にか當年の面影を偲ばんや！ 時の矛盾！
自然の矛盾！ 人生の矛盾！ 流水一度び
去つて復た還らざるか！慷慨して竭きず。
浮世の夢にも儂き人の運命、人生の不定を
唯々何者かなる、自然の絶對者へ訴へるの
である、この戦きは、我が愛の父に對する
心理である。

忽焉として天涯の一角に茶毘一片の烟と
なりて葬り去られし人々を、回顧する時、愁
雲胸にみち、憂霧心を閉し宵味も通らず、
歎歎慟哭言を發する能はずして唯斷絃の思
ひに浸り、浮世夢の如きに轉た人界の無常

山中籠居

裏山に湧きづる水は青竹の樋をつたひ来てここに鳴りつつ
裡山の朽葉のもとをくぐり來し寒の清水は齒に泌みにけり
午後三時はやこの谷に冬の日は暮れむとすなり底冷えて來ぬ
讀みつぎし書物は閉ぢぬさらさらと笹むら鳴りて鳴りひそみたり
はるかなる麓の町のものの音かはける空氣にひびきてきこゆ
小鳥らは此處にわれありと知らざらむ枝うつりしつつ囀りやます

哀唱

勤務先より友が寄越せし返信の文字のみだれは心もとなし
落ちつかぬ心静めてありし時つひに術なし計報至りぬ
幼などち母を戀ふる夜は氣丈なる君も泣くべしその枕べに
たらちねの母が逝きしは知らざらむ枕ならべて病み臥す兒らは
ありふれの言葉つらねし悔狀認めをへて何か寂しき

四月雜詠

かはるがはるゑさを興ふる兒らの後をしたひつつゆく庭鳥のこゑ
こころよき春の朝を床ぬちに幼きとりのこゑききてをり
久々に剃刀あつる吾が母の額の皺は深くなりたり
再びを踏むことなしと思ひけむ故郷の春野に君は佇ちつつ（日召父子）
奧利根のさびしき村に世を狭く老翁はひとりながらへて來し

亡兄七週忌

人の世の義理にせかれて唯ひと目會ふ術もなく逝かしめにけり
もろともにとしの三十路を生きあひてつひに語らふ日ぞなかりける

を嘆ずるのである』と言つた。
そこに熾烈なる生への執着があれば、無
常に寄す綿々たる哀切の聲がある。
且つて恩師は我に語られた。

この有限の生命の主である人間が、そし
て無窮を戀ふる人間が、原始時代の方、永
生を冀つて努力して來た登進の足跡は實に
顧みるだに驚異である。然も如何なる方法
も、努力も、生理的意味に於ける人間の永
生……に就いては何等教ゆるところがな
い『七丘の都』と誇つた羅馬の廢墟も果敢ない
人の生命を歎く自然の挽歌に過ぎない。神
と誇つたバビロンの文明も、怒り易き人間
の弱点を傳へる争鬪の舞台であつたのだ。
茲に思ひを走すれば、我々の創作の所産
たる藝術は、其の宇宙の無邊在に比すれば
尙有限たるを免れ得ないも、人の生命に比
較すれば話にならぬ程永生である。彼のホ
ーマは今に尙光輝ある詩篇を傳へ、ミケラ
ンゼロは尙『最後の晚餐』に依つて吾人に
語りかけてゐる。

されば生き度いと希求する人間にとつて
一ツの永生であり、眞に生き甲斐を感じし

亡き兄の友とし聞けば聲かけて在りし日のこと吾が知らむとす
 これの世に骨肉ありと知りつつもただに忍びて生きつづけけむ
 垂乳根の母の乳房を求めつつ夜毎泣きしを父は言ひにき
 人知れぬ思ひをかけてゐましけむ亡父のなげきは今も眼に見ゆ

山の湯にて

おのづから河鹿のこゑは澄みつつに岩たぎつ瀬の音にまぎれず
 朝霧のおもむろにして離れゆく杉の木立に蟬鳴き出でぬ
 しらじらと霧の流るる青葉山身は爽かに朝明けむとす
 うすぐらき崖の底ひの湯の壺に身を浮かべつつ時を忘れぬ
 足腰のいまだに立たぬ吾が母をお連れまをすは何時の日ならむ

七月十二日

皇國に捧げまつりしもろもろの命はあだに散りにけるはや
 つつしみてみ靈をまつるこの夕べ刑執行のニュース至りぬ
 あめつちに容れざる罪もさりながらただひとすぢの赤心は思ふ
 今からでも遅くはないと廣告に會話に聞くはにがにがしけれ

教へ子を悼む

繼母の手に育ちつつ陰影多き十八年を終りけるはや
 うからさへその枕べに在らざりし屋根裏にして息絶えしとふ
 腕白の生徒の中に青白く沈みぬし顔まざまざと見ゆ
 白き棺はふりびとらにかつがれて夕づく野邊を往くに従ふ
 生母とおなじ肺結核にて斃れたる若きいのちはかけて偲ばむ

夏日抄

むるもの、それは創作ではなからうか、而して茲に云ふ創作とは單に所謂小説のみを云ふのではない。廣い意味に於ける創作——繪畫、彫刻、音樂、文藝等を總括して——云ふのである。

且つて友人が、吾人等の手によりて成る小誌に投稿して

生れる時既に

孤獨と悲哀と空虚とを

背負はされてゐる

人間じゃないか

それを人生は愉快だなんて

人生は灰色の旅じゃないか

と云つた。然しそれは置き、今も昔も人の歩み行く人生行路の、丁度涯しなき熱砂の中に、一掬の水、オアシスを求めて徨ふ旅人の如く、坦々として且つ淋しきものなるを考へる時、佛のミレー。ダンテ 英のミルトン、シエクスピア 獨のゲーテ、カント 或は古代埃及のスフィンクス、ピラミット 或はカラカラ帝の大浴場 コロシエーム、萬里の長城、更に堪慶の佛像に、近松の戯曲に、ふくよかな薫りを放ち、百

照りつづきやうやくやくる畑つものなすびの皮はこはくなり來つ
びしよぬれのシヤツの乾る間を眞夏日に背を曝しつ草抜きにけり
土手下の叢中にひやしおく藥罐の水はおしみつつ飲む
わが顛頂うすくなりしをわけつけつと言ふこの友よ久しぶりなる
末の子が背に廻りつつやはらかき掌をもて顛頂撫づるも
たはむれに父のかうべを撫でにける幼きわれを今此處に見つ

初 冬

庭前の蘇鐵の大葉いち早く新葉をもてかこはれにけり
炬燵開けし宵は早寢の子どもらが起きゐて雜誌讀めとせがむも
庭隅の銀杏黄葉は散り過ぎぬ夕べの縁に見つともしも
樹々の葉の落ちつくしたる静けさや眞晝の庭に猫這入り來ぬ
縁にゐる吾れを見すゑて動かざる黒猫の腫の妖しき光
西窓の信濃境になみよろふ高山の穂に今朝雪を見つ

曩に皇太后宮より全國癩療養所へ賜はりし御歌の碑、身延深敬
病院に建立せらる。十月二十五日その除幕式に列す。

かしこみて御歌をうたふ患者らの合掌の姿は見るに堪へぬも
眼を閉ぢて静かにひびく合唱のこゑ聴きをれば胸せまり來ぬ
ふるさとの母が縫ひけむ晴衣をば病める乙女ら着かざりてをり
うつし身のししむら日々に腐りゆく若きいのちは思ふに堪へず
はらからもかへり見ぬ世を怨みつつ死にたる人の墓に詣でぬ
八千草の花咲き盛る墓どころ秋の日ざしは檜葉を洩れつつ
すいすいと蜻蛉飛び交ふ花畑に歩み來しとき心展けぬ

花咲き競ふ藝術の園のあつた事を有難くも
不思議な位に思ふ。誠に彼等が歩みし精進
の跡は、雲よりも高く遙かに天にをも達し
實に永生を欣求する人間の素晴らしい登攀
の足跡である。

半夜人なき机邊に古今の名作を繙く時、
そこには苦もなく、貧困もなく、我もなく
又闘争の現實の種々相も忽然と消えて、只
藝術のみが育くむ無限の恍惚境に我は没入
し、名狀し難き昂奮の坩堝の中に吾人はあ
やふく息づいてゐる。

斯く創作より受くる精神的の濕ほひは實
に大きい。然し創作は萬人には許されない
けれ共人間は藝術を通して始めて時間を超
越する事が出来るのだ。

彼のバイブルのある所キリストは今に尙
愛を叫び、トルストイは常に我等の机上に
あつて語りかけてゐるではないか、古くけ
た樂器の調べにもベトフヴェンの姿は躍
如として踊つてゐる。

おう!! 愛憎、善悪、強弱、生死の種々相
に圍繞さるる人生、それを藝術的創作に還
元して次の時代に傳ふる尊い一つの仕事。

これの世の呪ひはしまし忘れつつ培ひにけむ白菊の花
膿汁にまみれながらに三十年を闘ひ來ませる師は仰ぐべし(院長綱脇師)
遠き世の不輕菩薩を仰ぐごと師を圍みつつ人皆讚ふ

うみやまのほとり

岡村 正雄

春さらむぬくさと思ふ庭さきの牡丹の若芽雨にぬれつつ
土の香の匂ひいとしき露の薫帽子に摘みて歸り來たれり
鷹取の峰の端わたる雲白く陽はうらうらと照りなごむなる
月讀の光静けき夜となりて鷹取山にあをはづく鳴く

何くれと思ふこと多しあをはづくしきりに鳴きて日の昏るるなり
あへぎつつ登る山路はきはまりぬここにひつそり藤の花房

桑の葉に白き風吹く峽の道夏蠶の匂ひこもらへてをり

渚邊の白砂に咲く紫の小花は遂に知る人なしに (三保にて二首)

夕風で落日遙かにうつろへる駿河の海を吾が船歸る

みはるかす伊豆半島のおぼろみてこの夕暮を歸る船あり (田子ノ浦にて)

寝つかれぬ儘に歩めり蟲しぐれ聞きつつ吾れは月の下びを

みなぎらふ川面にさゆらぐほの明り唯だ一筋が月の下びに

ちきれ雲わたらふ丘の月夜みち蕎麥の花畑うちつけにしらし

かすかすの思ひ出こもる學報の出來榮見をれば涙こぼれ來(棲神發刊二首)

漸くに重任果し手にしたる本は灰かに匂ひたちくも

出家

さむざむと夕づく野みち行きつつに家督のことは話したりけり(吾は長男
なれば弟に)

よし！吾人は死ぬまで學ぼう、闘はう、
叩きに叩き、苦しみに苦しみ抜いて先づ自
らの魂を育てよう、そして死ぬ迄に、たつ
た一ツの汚点『人』てふ一字を白き永遠な
る線上に印して行かう。

これが吾人の唯一の希望である。只希く
は、人生に悔を遺さずに死んでゆける道が
歩み度い。『予は予の任務を了せり』と微笑
みつゝ逝ける様に。

蟬

上田玄忠

窓越に見る樹々の若葉は、降り注ぐ様な
眞夏の強い日光にきら／＼と輝いてゐる。
私は仰向になつてうと／＼として居たが、
林の中の蟬の鳴き聲がやかましくして眠れな
い、其の中に直ぐ前の木に蟬が飛んで來た
とみえて大きい聲で盛んに鳴き出した。ま
るで壊れた鈴でも振り立てるやうでやかま
しいと言つたらありはしない。

あの蟬は二十年間といふ長い／＼年月を
土の中で暮すのださうである。その長い修